

私の図書館利用法

法科大学院 丸藻 統一

私は幼少時から本が好きだった。自己紹介の趣味欄には、迷いもなく「読書」と記入するし、外出時、鞆には必ず一冊本が入っている。本に限らず活字媒体であれば新聞であろうと、辞書であろうと何だって「読む」対象となっていると言って良い。自分にとって読書とは、もはや趣味を越えて「体の一部」となっているのかもしれない。

そんな私だが、10代半ばまでは不思議と図書館には足を運ばなかった。父親が自分と同様の、むしろ自分以上の読書家であったため、実家に本が大量にあったことも関係しているかもしれない。詳しい理由は定かではないが、図書館と縁がなかったことは確かであり、「本は借りるより買う」という意識が強かった。

こんな自分が図書館通いをするようになったのは、高校生の頃からであり、もっとも図書館に通い詰めたのは大学生活の4年間であろう。その利用方法は、「暇さえあれば図書館に行き、専ら自分の専攻とは関係ない分野の本を読み漁る」というものであった。分からないことがあれば、別の本を読み、その中で専門外の事項があれば、さらに別の本を借りる。毎回、別の分野の書棚に行き様々な図書を机まで持って行き読み耽る…。もちろん講義で提出するレポート作成のためにも利用したが、やはり講義とは関係ない所での利用の方が多いただろう。おそらく、自分の中では、「本とは知らない事項に接するツールであり、図書館はそのために利用する施設である」という認識が強かったのだと考えられる。

確かに、学習環境としての図書館は有用であるし、資料も設備も豊富に揃っている。しかし、時には専門分野を離れて、新しい分野に触れてみることも必要であろう。新しい発見に遭遇することで、人生はより豊かになっていくのであり、そのような機会は貴重である。そう考えると、図書館はまさに「知らないこと」の宝庫であり、人生を豊かにするために積極的に利用することをお勧めする。